

教養プロジェクト2

橋本果奈
2020年8月4日

・本

『TUGUMI』（吉本ばなな）：

主人公まりあが、病弱で生意気な美少女つぐみとの一夏を振り返る。常に死と隣り合わせに生きるつぐみの行動は時に理解不能だが、それを優しく見守るまりあとの友情がみどころ。

『暮らしの哲学』（池田晶子）：

「哲学エッセイ」というジャンルを確立した著者の、亡くなる前の一年間に書かれた作品。当たり前の事柄に対する考察が深く味わい深い。季節ごとに、暮らしの中にある謎とともに生活する作者の思いが綴られる。

『ボッコちゃん』（星新一）：

著者の自選ショートショート集。道楽としてつくられた美人ロボットが、意図せず殺人を犯す「ボッコちゃん」など、昭和の作品ではあるが現代の社会において参考となるテーマが多数ある。

『三四郎』、『それから』（夏目漱石）：

夏目漱石の「三部作」のうちの二つ。熊本から上京し東大生となった三四郎の、都会の女性である美禰子との恋とすれ違いを描く「三四郎」、定職を持たず父からの援助で暮らす代助が、友人平岡の妻との再会により自分の運命を狂わせてゆく「それから」、それぞれ主人公の内面が繊細に描かれている。

『童話集 幸福な王子』（オスカー・ワイルド）：

金箔で覆われた王子の彫像が、貧しい人々のために自分の体の一部をつばめに頼んで分け与える「幸福の王子」など、愛や無垢を賛嘆した童話集。

『ノンちゃん 雲に乗る』（石井桃子）：

小学二年生の少女ノンちゃんの心の成長を描いた長編童話。木から池に落ちてしまったノンちゃんが夢うつつで経験した出来事が、池に映る「雲に落ちてしまった」経験として、ファンタジックに語られる。

『つぶやきのクリーム』（森博嗣）：

工学博士であり小説家でもある作者の見開き1ページのつぶやき集。失敗や成功について、また生き方についてなど、文系的なテーマへの考えが興味深い。

『春の雪 豊饒の海(一)』（三島由紀夫）：

侯爵家の嫡子松枝清頭と、伯爵家の令嬢綾倉聡子の、両思いながらも許されない恋と、その結末としての悲劇が描かれる。『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語。

『変身』（カフカ）：

ある朝目を覚ますと巨大な毒虫に変わっていた男の話。人間の変質が象徴的に描かれている。刊行当時、扉絵について「…昆虫そのものを描くことはいけません。遠くの方からでも、姿を見せてはいけません。」(『手紙』1915年より)と言っていたことから、作者はこの作品を単なるユーモアとしては考えていなかったと考えられる。

・音楽

バラード〈25の練習曲より〉(ブルグミュラー)：

1851年。初めはハ短調で怪しく始まり、途中でハ長調になると、一瞬のびやかな雰囲気を感じられるがまたもとのように怪しい雰囲気に戻る。一つの物語のようにも感じられる。

ハンガリー舞曲第5番(ブラームス)：

1869年。ブラームスがハンガリーのジプシー音楽に基づいて編曲した舞曲集のうちの一つ。始まりのメロディーのインパクトが大きく、引き込まれる。

夜想曲第2番 変ホ長調 作品9-2(ショパン)：

1832年。ショパンの夜想曲の中で最も知られた曲であり、甘美な旋律が特徴的。

トルコ行進曲(ピアノソナタ第11番第3楽章) (モーツァルト)：

いつ頃作曲されたか不明。日常の様々な場面で耳にする曲だが、改めて聞くと軽快なリズムとメロディーが耳に残り、色褪せない魅力を感じられる。

ラ・カンパネラ(『パガニーニによる大練習曲』第3番 嬰ト短調)(リスト)：

1851年。ピアノの高音による鐘の音色が特徴的であり、曲の初めからインパクトの強い旋律が印象的である。

アラベスク 第1番ホ長調(ドビュッシー)：

1888年。ドビュッシーの曲には叙情的なものが多いが、この曲はその特徴が顕著に表れていると感じる。メロディーの流れが美しく、なにか視覚的なイメージが頭に浮かぶ。

亡き王女のためのパヴァーヌ(ラヴェル)：

1899年。パヴァーヌとは、16世紀から17世紀にかけてヨーロッパの宮廷で普及していた舞踏を指し、この曲は、歴史上の特定の王女に捧げて作られたものではなくスペインにおける風習や情緒に対するノスタルジアを表現したものである。感情に訴えかける力が強いと感じる。

月の光〈ベルガマスク組曲より〉(ドビュッシー)：

1890年頃。当初のタイトルは「感傷的な散歩道(Promenade sentimentale)」であった。

ラルゴ(オンブラ・マイ・フ) (ヘンデル)：

ヘンデルの作曲したオペラ『セルセ』第1幕冒頭のアリア。世界で初めて電波に乗せて放送された音楽。官能的な魅力から『セルセ』の中で「オンブラ・マイ・フ」のみが愛唱されるようになる。

月光(ピアノソナタ第14番 嬰ハ短調 作品27-2)(ベートーヴェン)：

1801年。自らのピアノの弟子となった14歳の伯爵令嬢ジュリエッタ・グイチャルディに

献呈された。ピアノソナタ第8番『悲愴』、同第23番『熱情』と並んで3大ピアノソナタと呼ばれることがある。

・芸術

本阿弥光悦「蓮下絵和歌巻」:

江戸時代、17世紀前半。散らし書きの大胆な余白と対照的でない行の配置などが日本の美意識を映し出すものとして評価される。下絵は俵屋宗達。

王羲之「蘭亭序」:

353年。王羲之が名士や一族を蘭亭に招き、宴の中で蘭亭集の序文として書いた文章。当時王は酒に酔っている状態で作品を書いたが、のちに清書し直そうとしても当時の出来以上のものはできなかった。

呉昌碩「臨石鼓文」:

1918年、中華民国時代。呉昌碩は、清朝末期から中華民国初頭にかけて「最後の文人」と呼ばれ、古代文字を自分の書作品に応用した人物。この作品は「石鼓文を臨書したもの」であるが、偏と旁の位置を微妙にずらしたり、躍動的でリズムカルな筆遣いで書かれている。

「爨宝子碑」:

5世紀初頭、東晋の石碑。石碑のための一種の装飾的な書体と考えられている。内容としては、若くして亡くなった爨宝子という人を悼むものだが、書体からはどこか稚拙さやユーモアが感じられる作品となっている。

小野道風「屏風土代」:

928年、平安時代。「土代」というのは下書きのことで、宮中で使用する屏風を制作したときの下書き。時間をかけゆっくりと筆を運んだことがみてとれる。

黄庭堅「黄州寒食詩巻」跋:

200年、宋時代。黄庭堅が、蘇軾の「黄州寒食詩巻」を評したもの。内容としては「もういちど書かせてもこれほどの出来ばえにはならないだろう」。字は大きく、解放的である。

顔真卿「顔氏家廟碑」:

780年、唐時代。顔真卿が父の霊廟のために建立した石碑に刻まれた書。顔真卿が自分の祖先をたたえ、自らのアイデンティティを再確認しようとする文章であり、書自体が力強い意志を感じさせる。

手島右卿「崩壊」:

1957年。戦後日本書の代表作の一つ。昭和20年の東京大空襲で焼けつくされる東京の記憶を念頭に書いたと作者は語っており、伝統的には避けられていた淡墨を使い書かれている。

空海「金剛般若経海題残巻」:

9世紀、平安時代。空海は密教だけでなく、唐の書を意欲的に吸収し日本に持ち帰った人物、文字が右肩上がりで左にかしいでおり、筆をやや倒して書いてあるという特徴は、王羲

之やその影響を受けた唐代の孫過庭の書と類似している。

伝藤原行成「升色紙」：

11世紀、平安時代。清原深養父という歌人の歌集を書いたもの。余白や墨の潤滑が駆使され、「もののあはれ」にも通ずる出来ばえである。

参考資料：

- ・『ハンガリー舞曲』（最終訪問:2020.8.4）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%AA%E3%83%BC%E8%88%9E%E6%9B%B2>

- ・『亡き王女のためのパヴァーヌ』（最終訪問:2020.8.4）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%A1%E3%81%8D%E7%8E%8B%E5%A5%B3%E3%81%AE%E3%81%9F%E3%82%81%E3%81%AE%E3%83%91%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%8C>

- ・『ベルガマスク組曲』（最終訪問:2020.8.4）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%99%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%9E%E3%82%B9%E3%82%AF%E7%B5%84%E6%9B%B2>

- ・『オンブラ・マイ・フ』（最終訪問:2020.8.4）

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%B3%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%83%9E%E3%82%A4%E3%83%BB%E3%83%95>

- ・『ピアノソナタ第14番（ベートーヴェン）』（最終訪問:2020.8.4）

[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8E%E3%82%BD%E3%83%8A%E3%82%BF%E7%AC%AC14%E7%95%AA_\(%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%B3\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8E%E3%82%BD%E3%83%8A%E3%82%BF%E7%AC%AC14%E7%95%AA_(%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%B3))

- ・『書のひみつ』古賀弘幸/著、佐々木一澄/イラスト